柴山兎一（しばやまういち）

安政3（1856）年−没年不詳

養蚕家、犬飼町長

田原村（犬飼町）に生まれ、青年時代から養蚕を学び養蚕所を建てて、大野郡内屈指の飼育者となります。近郷に養蚕を普及宣伝して、養蚕発展に尽くしました。明治32（1899）年より犬飼村長や郡会議員に当選し自治にも貢献しました。

（大分県歴史人物事典・犬飼町誌）

神宮林吾（しんぐうりんご）

明治3（1870）−昭和10（1935）年

医師

百枝（三重町）の医師の家に生まれ、大阪医学校や長崎医学校で医学を学び、東京の病院で実技を習得し外科医師として帰郷して家を継いでいます。明治43（1910）年に犬飼医院を開業し、施療と衛生思想の普及に努力する一方、県郡医師会の幹部として、大野水力電気株式会社、犬飼魚市場株式会社の社長としても活躍しました。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

仙波梧楼（せんばごろう）

明治11（1878）−昭和36（1961）年

医師

小倉木村（大野町）に生まれ、日露戦争に軍医として出征後、牧口村岩戸（清川町）で開業します。以来村医や学校医で医療行政の基礎造りに努め、大野郡医師会長に推挙されて郡医療の振興に尽力しました。また村会議員や県会議員も勤めています。

（大分県歴史人物事典・清川村誌）

田口母山（たぐちぼざん）

文政12（1829）−明治17（1884）年

僧

臼杵町で生まれ、若くして仏門に帰依し、井上村（緒方町）の大福寺住職となります。勤皇の志に厚く、明治3（1870）年に旧長州藩の政府に抗した大楽源太郎をかくまい、百日の禁獄に処せられました。後に教職に就き、大阪に出て大阪日報を経営しました。

（大分県歴史人物事典）

田原至誠（たはらしせい）

明治43（1910）−昭和47（1972）年

教育者、俳人

長峰（千歳町）に生まれ、兵役に就いて負傷した後に教職に就き、戦後は三重高校千歳分校や犬飼分校に勤めました。退職後は広報紙「窓」を編集するかたわら俳句の指導をしています。

（大分県歴史人物事典・千歳村誌）

田原平蔵（たはらへいぞう）

安政5（1858）−明治40（1907）年

養蚕家

犬飼町の生まれで酒造業のかたわら、飼育から蚕種製造・製糸まで一貫した養蚕伝習所を作り近郷農家に教授しています。また、犬飼郵便局長となり、犬飼酒造合資会社設立にも参画しました。

（大分県歴史人物事典・犬飼町誌）

田吹繁子（たぶきしげこ）

明治35（1902）年−昭和63（1988）年

歌人

朝地町に生まれ、関東女学校に勤めますが、夫に死別し歌道に入ります。戦後別府市に移住し、県下の短歌教室で指導、読者文芸の選者となります。仏国詩人ジャンヌ・グランジャン氏と交流し国際親善にも尽くしました。西南役の激戦地となった三国峠に「兵あまたいのち捨てたるこの丘は今秋草の花にうもるる」の歌碑があります。（大分県歴史人物事典）

筑波玄仲（つくばげんちゅう）

文政2（1819）−明治24（1891）年

岡藩の医師

志土知村（竹田市）で医業を開いていましたが、岡藩の御番医であった筑波家の養子になり、郡山村（大野町）に移り住みました。以後地区民に慕われ、藩主から何度も賞されました。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

徳田白楊（とくだはくよう）

明治44（1911）−昭和8（1933）年

歌人

上緒方村（緒方町）生まれ。本名森下文夫。旧竹田中学校在学中から短歌をつくり、大分歌壇に投稿、しばしば入選しています。土屋文明と出会い、本格

的に作歌生活に入り、「アララギ」に入会しましたが、病気のため享年 21 歳で他界しました。

（大分県歴史人物事典）

仲村長秋（なかむらちょうしゅう）

天保3（1832）－明治37（1904）年

書家

田中村（大野町）の生まれで、幼い頃から和漢の書を読み、田中郵便局長を 20 年勤めました。書は無欲恬淡、こだわりのない風格が感じられ、大幅が多く、絵も好んで画いています。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

成田碩内（なりたせきない）

元治元（1864）－昭和5（1930）年

漢詩人、書家

号は魯石。肥後領鶴崎（大分市）で生まれ、明治 2（1869）年三重村大字市場の成田家に入る。大分・大野郡の教員を勤めるかたわら漢詩を学び、43 歳で漢詩の大成を志し上京。その後京城（朝鮮）に渡り、亡くなるまでの 20 年程を過ごします。漢詩のほか書道も得意とし、多くの筆跡を残しています。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

難波三江（なんばさんこう）

天保11（1840）－明治26（1893）年

南画家

小坂村（三重町）に生まれ、三江は雅号で、名は千尋といい、13 歳で宮尾組大庄屋の難波家の養子となります。幼い頃から画を好み、帆足杏雨に師事し、師範学校の画家教師なども務めます。40 歳で一切の公職から離れ、花鳥画を得意として、画道に励みました。柴山八幡社に絵馬が残されています。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

野田金三郎（のだきんざぶろう）

安政2（1855）－大正8（1919）年

実業家

大分市鶴崎で生まれ、犬飼野田家（現犬飼町）に養子となりました。家業の酒造や雑貨商のほか肥料や農具の販売とともに農家に生産指導を行なうなど地方の指導的存在であり、家業は発展しました。また犬飼村会議員や大野川浚渫の世話役もしています。

（大分県歴史人物事典・犬飼町誌）

羽田野次郎（はだのじろう）

明治36（1903）－昭和63（1988）年

農業指導者、衆院議員

緒方村（現緒方町）で生まれ、東京市役所に勤務後帰郷し、緒方村農協組合長・県農協連絡協議会長時代に農協五連結成発起人会総代表として各連合会の創立を指導し、信用農協連合会長に就任。昭和 24（1949）年に衆院選に当選し協同党・農民協同党書記長となり、政界引退後も農協各連会長を歴任しました。

（大分県歴史人物事典）

羽田野長蔵（はだのちょうぞう）

嘉永3（1850）－昭和9（1934）年

著述家

原尻村（現緒方町）に生まれ、明治 22（1889）年に南緒方村会議員、同年村長となり、原尻学校の創設、道路井路の開削、新農業法の計画・指導などに尽力しました。郡会議員を勤めた後、青年時代に見聞した藩政の一端、明治維新の影響、西南戦争の体験など庶民の側から見た歴史を叙述し、後に「岡藩時代之雑事」として刊行され地方史研究に貢献しています。

（大分県歴史人物事典）

羽田野鳥太郎（はだのとりたろう）

明治元（1868）－昭和4（1929）年

林業家

明治村植木（現竹田市）に生まれ、西大野村鳥屋（現朝地町）の羽田野家の養子となります。道路の改良、造林事業、開田などに意を注ぎ、地域開発の旗手となります。村会議員や郡会議員を勤めながら神角寺国有林造林事業を完遂しました。

（大分県歴史人物事典・朝地町史）

土生米作（はぶよねさく）

明治24（1891）－昭和45（1970）年

教育家

市場村（現三重町）に生まれ、小学校教職に携わった後渡鮮し、24 年間実地の教育により、終戦後在駐米軍当局より教職適格の推薦を受けました。帰郷後は教職や社会福祉施設創設のかたわら、社会教育委員など公民教育にも貢献しました。書画・俳句・短歌・随筆・童謡などの作品を創作し、郷土史の研究にも取組んでいます。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

原尻奥之丞（はらじりおくのじょう）

正徳元（1711）−宝暦9（1759）年

井上村（緒方町）の農民

宝暦３（1753）年に凶作により強訴を起こした首謀者の罪で、岡藩より処刑されました。その後虫送りの行事である小松明に、虫送りの守護神として原尻奥之丞の供養も行なわれるようになったと伝えられています。（大分県歴史人物事典）

伏野義雄（ふせのよしお）

明治25（1892）−昭和40（1965）年

四重電信の発明者

三重村（現三重町）で生まれ、電信の研究により四重電信を発明し、海底電線工事を指導するなど日本通信界に多大な貢献をしました。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

古荘梅谷（ふるしょうばいこく）

寛政10（1798）−慶応元（1865）年

江戸時代の医師

宇田枝（清川町）生まれ。代々家業としていた医業に精進し、藩校由学館の医官として活躍しています。その傍ら、詩文や書画にも熟達し、文人としても優れた作品が知られています。

（清川村誌）

古田兵作（ふるたひょうさく）

天保4（1833）−明治37（1904）年

農事改良家

小原村（清川町）の生まれで、木南切の古田家の養子となりました。家業の酒造業を長男に譲った後、農事改良の研究や実践指導と普及に努め、農業の発展に貢献しました。

（大分県歴史人物事典・清川村誌）

戸次道雪（べっきどうせつ）

永正10（1513）?永正13（1516）?−天正13（1585）年

戦国時代の武将

名は鑑連。鎧ヶ嶽城（大野町）で生まれ、出家した後に道雪と名乗りました。戸次氏は初代より大野郡大野郷中村（大野町）の地頭に任じられた有力な大友家の家臣です。鑑連は大友21代義鎮（宗麟）の頃加判衆（家老）として大友氏を支え、後に筑前（福岡県）の立花城主となります。島津氏との戦いでは大友家臣団に動揺が広がると、檄文を出すなど結束を呼びかけますが、陣中で病のため亡くなりました。養子とした立花宗茂は後に筑後柳川藩（福岡県）の大名となりました。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

宮成吉郎右衛門（みやなりきちろうえもん）

生年不詳−文化9（1812）年

新殿村（千歳町）の農民

文化９（1812）年の百姓一揆の指導者として藩により捕えられ、新殿の市右衛門や、栗ヶ畑村（犬飼町）の半右衛門らとともに死罪となりました。

（千歳村誌）

幸貞左衛門（ゆきていざえもん）

文化4（1807）−明治3（1870）年

教育者

臼杵藩士の家に生まれ、犬飼の豪商「関屋」に養子として迎えられました。岡藩内でも数少ない漢学(中国の学問）を教える関屋塾を開き、子女の教育に力を注ぎ、多くの人材育成に貢献しました。

（犬飼町誌）

幸寿（ゆきひさし）

明治44（1911）−平成15（2003）年

画家

千歳村生まれ。早稲田大学中退後、独学で絵画を学びます。ピカソの影響を受けますが、次第にシュルレアリズム風画風に変わり、昭和18（1943）年に美術文化協会展で受賞し会員となります。戦後２年間大分の精神科病院に起居し、「狂女シリーズ」を描いて独自の画風を確立しました。

（大分県立美術館ＨＰより）

渡辺長男（わたなべおさお）

明治7（1874）−昭和27（1952）年

彫塑家

上井田村（朝地町）生まれ。朝倉文夫の実兄。東京美術学校在学中は日本画・木彫・彫塑を学びます。卒業後は彫塑に一生をかけ、特に銅像では草創期の第一人者です。

（大分県歴史人物事典・朝地町史）

【豊後大野市にゆかりのある人物】

井上並古（いのうえなみふる）

享保18（1733）−寛政10（1798）年

岡藩の藩政改革者

号は有淵、通称は主水左衛門。一代家老として岡藩主中川久貞に仕え、藩政の改革を進めました。農民救済の政策は農民に歓迎され、藩財政再建に多大な功績がありました。息子並増によって造られた墓所が朝地町近地に所在し、同じく一代家老となった並増とともに葬られています。

（大分県歴史人物事典・朝地町史）

大友能直（おおともよしなお）

承安2（1172）−貞応2（1223）年

鎌倉時代初期の幕府御家人で大友氏の始祖

源頼朝の側近中原親能の養子となり、頼朝に仕えました。建久 5（1194）年に豊後国守護を拝命され、自身は鎌倉や京都にいて、弟の古庄重吉を遣わせて領国の政務をとらせています。京都で死去しますが、大野町の勝光寺を菩提寺に、常忠寺に墓碑が伝えられています。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

雪舟（せっしゅう）

応永27（1420）−永正3（1506）年

室町時代の画僧で、わが国で水墨画の完成者

出家して京都で絵を学び、中国でも修行を行なっています。文明 8（1476）年に府内（大分市）で創作活動を行い、「鎮田瀑図（ちんだばくず）」（大野町・沈堕の滝）を描いたことで知られています。

（大分県歴史人物事典）

種田山頭火（たねださんとうか）

明治15（1882）−昭和15（1940）年

放浪の俳人

山口県の生まれで、酒と旅を愛し、九州・四国・中国を托鉢遍歴し、漂泊の旅を続けて、暮らしを自由律で句にしています。昭和 5（1930）年に三国峠から三重町を訪ね、清川・緒方町を通過して竹田へ向かう間にいくつかの作品を残しています。

（大分県歴史人物事典）

中川久清（なかがわひさきよ）

慶長20（1615）−天和元（1681）年

岡藩三代藩主

儒学者の熊沢蕃山を招いて藩政改革を行い、緒方井路（上井路）の水利工事や犬飼港の整備を手がけるなど、数々の岡藩の藩体制を確立させる政策を行なっています。

（大分県歴史人物事典）

中川久貞（なかがわひさただ）

享保9（1724）−寛政2（1790）年

岡藩八代藩主

在任中、岡城の火災や暴風雨や凶作の被害などで財政状況が悪化したため、井上並古を登用するなどの藩政の改革を行なっています。死去後小富士山に埋葬され、尊崇する儒教に則った墓所が造営されています。

（大分県歴史人物事典）

野上弥生子（のがみやえこ）

明治18（1885）−昭和60（1985）年

作家

臼杵市生まれで本名ヤエ。文化勲章を受章し、文化功労者にも選ばれた作家。母マサは三重町市場出身で処女作『縁（えにし）』は「三重町のおばば様は…」から始まっています。

（大分県歴史人物事典）

参考文献

『大分県歴史人物事典』　1969 年大分合同新聞社
『大分歴史事典』　平成 2 年 株式会社大分放送
『三重町誌沿革編』　昭和 62 年 三重町役場企画商工観光課
『清川村誌』　昭和 54 年 清川村誌刊行会
『朝地町史』　昭和 42 年 朝地町史編集委員会
『緒方町誌総論編』　平成 13 年　緒方町
『大野町史』　昭和 55 年 大野町史刊行会
『千歳村誌』　昭和 49 年 千歳村誌刊行会
『犬飼町誌』　昭和 53 年 犬飼町誌刊行会
『悠久に舞継ぐ御嶽神楽』　平成 15 年 清川村役場総務企画課
『孤高の絵旅人　石野玉儕』　平成 6 年 株式会社エフエム大分
『大分の石拱橋』　昭和 52 年　赤嶺英一